

弥富人物伝 ダイジェスト

弥富の文鳥文化 復活を

県内の農業高校で唯一、愛玩動物専攻がある愛西市の佐屋高校農業科で、生徒と教諭が、学校に隣接する弥富市で盛んな文鳥の生産を引継ぎ継ぐと奮闘している。かつて日本一の規模を誇った「弥富の文鳥」だが、いまや生産者は減少して風前のともじびに。「いつか文鳥の文化を復活させたい」。プロでも難しいという文化に、生徒たちは挑んでいる。

(南拡大朗)

愛西 佐屋高校生ら繁殖に奮闘

ウサギ、モルモット、小動物や昆虫を飼育する動物室。飼育高校の小動物室。まだ幼い一羽の文鳥がかじから出され、生徒の手のひらで「手乗り」を披露した。三年生寺坪七海さん(も)と富田みず希さん(も)が、四月から授業の合間に繁殖に餌やりをしたり、週末に自宅を持ち帰ったりして世話を



●真っ白の羽が特徴の白文鳥は弥富で産まれた。●男子と手乗りするまでに幼鳥を育てた佐屋高の生徒たち。いずれも愛西市の佐屋高で

現場から

「ばかいい」と笑う。富田さんは、動物なので思い通りの結果にならないことが難しく、もあり、楽しみでもある。と手摺にかけた幼めた大河内元良さん(一)「弥富市又八」に鳥を見つめる。

佐屋高は、文鳥生産の中心だった弥富市北を定めて残った生部の又八地区から北西 産者は一軒だけ、いに「一」の場所にあらずしも高齢で後継者は二〇〇九年に弥富いない。近年は、中国文鳥組合が解散したの産の餌代の高騰がさらを機に、生産者の有志に追い打ちをかけている。飼育技術を継承する。「餌代はの五年で成鳥までの寄贈を三倍になった」と嘆く。

弥富の文鳥 江戸時代と、ヒックだった昭和40年代に末期に又八地区飼育が、近隣の津島市や三重県桑名に始まった。明治時代には、市にも生産が広がり、計300名現在も親しまれる「白文鳥」が軒ほどの農家が副業として手掛誕生。品種改良の待産地となっていた。昭和50年代以降、戦後は文鳥の国内生産の9割を占めた。大河内さん(一)の生産者は急激に減少した。



津島市立南小学校
浅井 厚視

人物伝①

服部左京進(友定)

○織田信長の最初のライバル（信長公記）

○荷之上の服部党の殿様、桶狭間の戦いで今川義元に味方

「武者舟を千艘出した」

○上相場で討ち取られる



服部党とは、河内一郡(旧海西郡、立田・佐屋・弥富・桑名市長島・長島郡木曾岬)あたりを支配していた。水軍をもち、浄土真宗を信じ、信長と激しく争った。

長島一向一揆は 織田信長と服部党(黒宮党)との争いと考えることもできる。

左京進を殺された後、服部党は長島願証寺のリーダーとなり、小木江城を攻め、織田信興(信長の弟)を自害させ、長島城代として活躍した。そこで織田信長は荷之上の服部党を攻めるために鯛浦城(鯛浦山薬師寺)を築いた。



人物伝②

宮崎筠圃 (みやざきいんぽ)



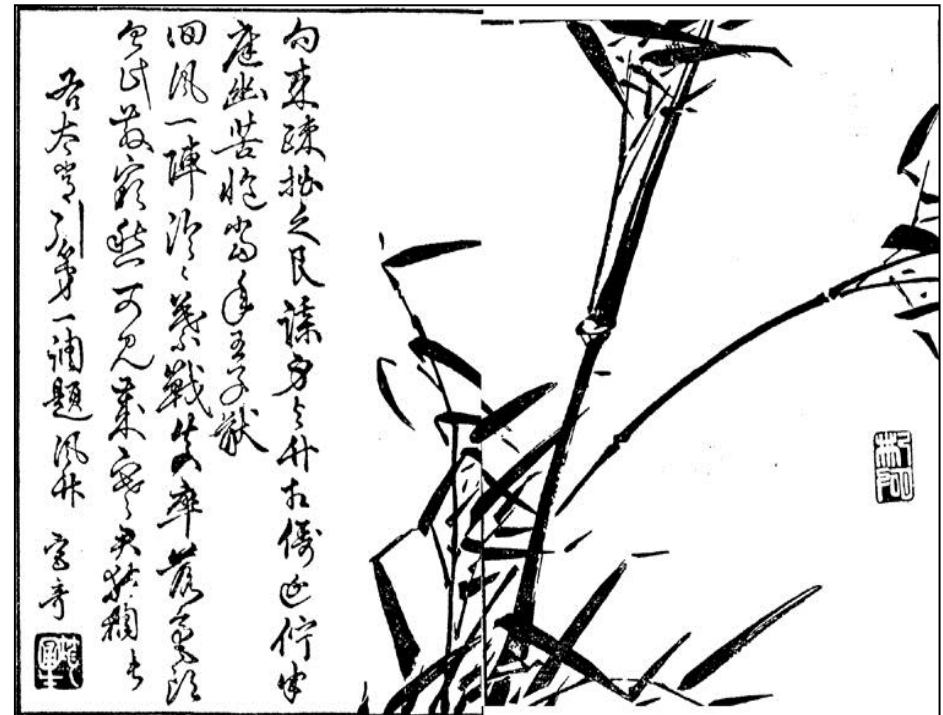
生年 享保2年(1717)

弥富市鳥ヶ地出身

江戸時代の書家・画家・
漢詩人

京都に移り住み、伊藤東涯に教えを受ける。

庭に竹を植え、こよなく愛した。



父春助は大変厳しく、「勉めよや 汝我が学業を継がずんば吾が子にあらず」と指導した。

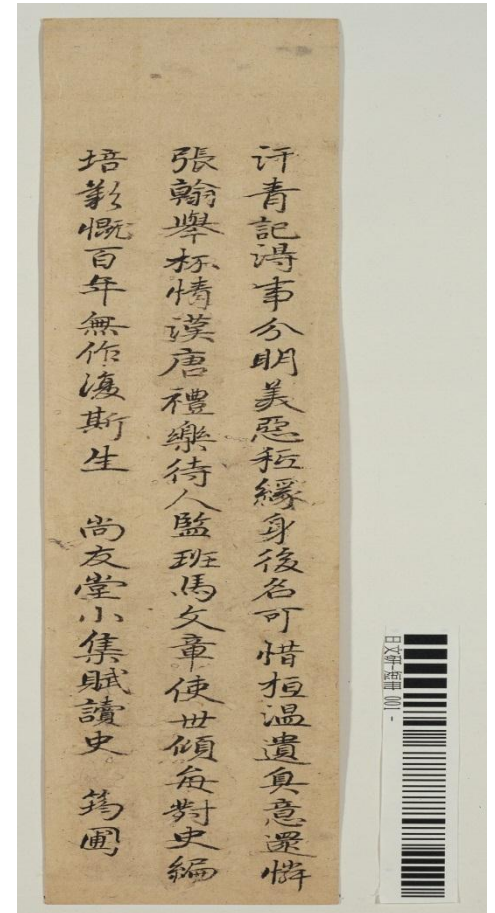
古学(宋代の教えではなく、孔子本来の教え)を学ぶ

○書、墨竹画

平安の四竹と言われた。

体が弱かったが、母親に心配をかけまいと努め、母が病気となると背負って京都の名所をまわった。

○「窮して(貧しくして)益々堅かるべし 父の遺命忘るることなかれ」



人物伝③

曾與(そよ)

生年 享保13年(1728)

○弥富市鳥ヶ地

○父(善六)は妻と離別(そよ1才)男手だけで「そよ」を育てる。

○祖父や父を大切にしたそよ。父への感謝の気持ちで一杯。



曾與糸を紡ぐ図

曾與綿を打つ図

高等小学校:修身教科書に掲載され、著名に。

さみしさのためにお酒を飲みすぎ、田に落ちたり、道ばたに寝ころがったりする父をかいはうしました。



十四山鳥ヶ地新田が尾張藩志水家の領地だったので、尾張藩公から表彰された。

鳥ヶ地に住む西河菊莊により『孝女曾與伝』として安永7(1778)年に出版された。曾與は寛政12(1800)年に71歳で亡くなった。

人物伝④ 八重(やえ)

文鳥の生まれ故郷は、マレー半島やインドネシアです。わが国には中国を經由して江戸時代に伝わりました。長きにわたり、武家屋敷で愛育されていました。

- ・ 元治元年頃(1865)尾張藩の武家屋敷に奉公していた「八重」が弥富市又八地区の大島新四郎方に嫁入りした時に土産として持参したのが始まりと言われていています。

- ・ 明治のはじめ頃、突然変異により「白文鳥」が誕生し、これを飼育した結果、弥富市は白文鳥の里と呼ばれるようになりました。



○文鳥を日本で本格的に繁殖した人物は「大島八重」という女性。彼女は江戸時代末期(元治元年[1864]という)に武家奉公先から現在の愛知県弥富市(又八)へ嫁ぐ際、奉公先から文鳥を持参してきた。武家屋敷で飼っていた文鳥の世話をしていた女中の娘が結婚する際に、文鳥を与えられたという話。

○のちに白文鳥発祥の地となり、八重さんはその創始者となった。

○小学館の百科事典「文鳥」項に「尾張藩(愛知県)の名古屋を中心に下級武士の内職としてその巣引きが普及したといわれる」



人物伝⑤

黒宮重佳

文化11(1814)年、六條新田生まれ。砂郊。俳句・碁・挿花を究めました。明治12年、66才で死去。多くの門弟を育てました。

其先曰重義稱修理津島市江島邑蓋邑之豪族其子弟分産稱七族爰以一向衆徒保守伊勢国長島城……

